

ぼくはチンパンジーと

話ができる

亀井一成著

PHP研究所発行

私は、はずかしいことに題名にひかれてこの本を読み、期待通りの内容に時には涙を流し、時にはたまらないほほえましさを感じました。そしてあまつさえ編集の水田さんに「軽い本、お貸ししましたよ」などといってこの本をお貸ししました。ところが「とても良い本でしたから図書紹介を」との電話をいただいた。また改めて読み直し、それこそ私自身の軽さに、いやになってしまいました。

この本にはまず、小さい時から動物好きだった（ここまではよくあるケースですが）著者が、中でも魅かれた象のキー

パーとして神戸の王子動物園に入られたいきさつが書かれています。そしてその象が、著者に忠実であったために芸達者になり、その上そのために地方巡業が多くなり、ついに結核で命を落とすまでの生涯を克明に書いてあります。その時にまだ青年キーパーであった著者が、「動物はやはりのほほんとしかしてやらねばならない。檻の中に閉じ込めたのならなお、せめて伸びやかに、野性への郷愁をたしかめつつ、生かしてやらねばならぬ」ことに気づかれたことに、私は本当に頭をがんとたたかれたような思いを味わいました。その後著者は、この精神を貫きながら題名のチンパンジーとの生活を始め、チンパンジーの場合はショーをやめ、子どもを生ませることに情熱をそそいだ、その記録が書かれています。し

かし序文に「以下は断じて動物の飼育記ではない。動物と人間との触れあいを通じて、地上の支配者面をしている人間にいま何が問われているか、それを思い起こして、燃えるような思いにとらわれるのである」とある通り、全篇を通じてこの著者の燃えるような思いが脈々として読者に訴えかけているのです。

チンパンジーの赤ちゃんの人工飼育に当たっては、著者の奥さま息子さんのあたたかい協力、そしてそれらがまったくためにしたのではなく、そうしなければ育たなかったからという、一種の無心の境地をそこに見て、私は改めてこの本、著者の両方にほれぬいてしまいました。

いつの日か、このご本人とご家族、そして愛すべき息子さんたちにお会いしたい……と思っています。（赤間峰子）